

月例経済報告

(平成21年10月)

―景気は、持ち直してきているが、自律性に乏しく、

失業率が高水準にあるなど依然として厳しい状況にある。―

先行きについては、当面、雇用情勢が悪化傾向で推移するものの、海外経済の改善などを背景に、景気の持ち直し傾向が続くことが期待される。一方、雇用情勢の一層の悪化や海外景気の下振れ懸念、金融資本市場の変動の影響など、景気を下押しするリスクが存在することに留意する必要がある。

平成21年10月16日

内閣府

[参考] 先月からの主要変更点

	9月月例	10月月例
基調判断	<p>景気は、失業率が過去最高水準となるなど厳しい状況にあるものの、このところ持ち直しの動きがみられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸出、生産は、<u>持ち直している</u>。 ・企業収益は、大幅な減少が続いているが、そのテンポは緩やかになっている。設備投資は、減少している。 ・雇用情勢は、<u>一段と厳しさを増している</u>。 ・個人消費は、<u>このところ持ち直しの動きがみられる</u>。 <p>先行きについては、当面、雇用情勢が悪化するなかで、<u>厳しい状況が続くとみられるものの、在庫調整の一巡や経済対策の効果に加え、対外経済環境の改善により、景気は持ち直しに向かうことが期待される</u>。一方、<u>生産活動が極めて低い水準にあることなどから、雇用情勢の一層の悪化が懸念される</u>。加えて、世界的な金融危機の影響や世界景気の下振れ懸念など、景気を下押しするリスクが存在することに留意する必要がある。</p>	<p>景気は、<u>持ち直してきているが、自律性に乏しく、失業率が高水準にあるなど依然として厳しい状況にある</u>。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸出は、<u>アジア向けを中心に、増加している</u>。生産は、持ち直している。 ・企業収益は、大幅な減少が続いているが、そのテンポは緩やかになっている。設備投資は、減少している。 ・企業の業況判断は、<u>依然として厳しい状況にあるものの、全体として持ち直しの動きが続いている</u>。ただし、<u>中小企業ではそのテンポは遅い</u>。 ・雇用情勢は、<u>悪化傾向が続いており、極めて厳しい状況にある</u>。 ・個人消費は、<u>持ち直しの動きが続いている</u>。 <p>先行きについては、当面、雇用情勢が悪化傾向で推移するものの、<u>海外経済の改善などを背景に、景気の持ち直し傾向が続くことが期待される</u>。一方、雇用情勢の一層の悪化や海外景気の下振れ懸念、<u>金融資本市場の変動の影響など、景気を下押しするリスクが存在することに留意する必要がある</u>。</p>
政策態度	<p>政府は、<u>当面、景気対策を最優先で進めるため、「経済危機対策」等を着実に実施する</u>。また、「安心・活力・責任」の3つの目標を同時に達成するための道筋を示す「<u>経済財政改革の基本方針2009～安心・活力・責任～</u>」に基づき経済財政運営を進める。</p> <p>日本銀行に対しては、我が国経済が、物価安定の下での持続的成長経路に復帰するため、引き続き政府との緊密な連携の下で、適切かつ機動的な金融政策運営を期待する。</p>	<p>政府は、<u>家計の支援により、個人消費を拡大するとともに、新たな分野で産業と雇用を生み出し、内需を重視した経済成長を実現するよう政策運営を行う</u>。また、<u>現下の厳しい雇用情勢に細心の注意を払い、それを踏まえた対応策を検討する</u>。</p> <p>日本銀行に対しては、我が国経済が、物価安定の下での持続的成長経路に復帰するため、引き続き政府との緊密な連携の下で、適切かつ機動的な金融政策運営を期待する。</p>

	9月月例	10月月例
個人消費	<u>このところ持ち直しの動きがみられる</u> 。	<u>持ち直しの動きが続いている</u> 。
輸出	<u>持ち直している</u> 。	<u>アジア向けを中心に、増加している</u> 。
輸入	<u>持ち直しの動きがみられる</u> 。	<u>持ち直している</u> 。
業況判断	<u>厳しい状況が続いているが、大企業においては持ち直しの動きがみられる</u> 。	<u>依然として厳しい状況にあるものの、全体として持ち直しの動きが続いている</u> 。ただし、 <u>中小企業ではそのテンポは遅い</u> 。
雇用情勢	<u>一段と厳しさを増している</u> 。	<u>悪化傾向が続いており、極めて厳しい状況にある</u> 。

(注) 下線部は、先月から変更した部分。

月例経済報告

平成 21 年 10 月

総 論

（我が国経済の基調判断）

景気は、持ち直してきているが、自律性に乏しく、失業率が高水準にあるなど依然として厳しい状況にある。

- ・輸出は、アジア向けを中心に、増加している。生産は、持ち直している。
- ・企業収益は、大幅な減少が続いているが、そのテンポは緩やかになっている。設備投資は、減少している。
- ・企業の業況判断は、依然として厳しい状況にあるものの、全体として持ち直しの動きが続いている。ただし、中小企業ではそのテンポは遅い。
- ・雇用情勢は、悪化傾向が続いており、極めて厳しい状況にある。
- ・個人消費は、持ち直しの動きが続いている。

先行きについては、当面、雇用情勢が悪化傾向で推移するものの、海外経済の改善などを背景に、景気の持ち直し傾向が続くことが期待される。一方、雇用情勢の一層の悪化や海外景気の下振れ懸念、金融資本市場の変動の影響など、景気を下押しするリスクが存在することに留意する必要がある。

（政策の基本的態度）

政府は、家計の支援により、個人消費を拡大するとともに、新たな分野で産業と雇用を生み出し、内需を重視した経済成長を実現するよう政策運営を行う。また、現下の厳しい雇用情勢に細心の注意を払い、それを踏まえた対応策を検討する。

日本銀行に対しては、我が国経済が、物価安定の下での持続的成長経路に復帰するため、引き続き政府との緊密な連携の下で、適切かつ機動的な金融政策運営を期待する。

1. 消費・投資などの需要動向

個人消費は、持ち直しの動きが続いている。

個人消費は、経済対策の効果もあって、持ち直しの動きが続いている。消費者マインドは、低水準ながら持ち直している。実質雇用者所得は緩やかな減少傾向にある。需要側統計（「家計調査」等）と供給側統計（鉱工業出荷指数等）を合成した消費総合指数は、8月は前月に比べ増加した。

個別の指標について、8月の動きをみると、「家計調査」では、実質消費支出は前月から増加した。販売側の統計をみると、小売業販売額は前月から増加した。新車販売台数は、8月に増加した後、9月も増加した。旅行は、国内、海外ともに前年を下回った。外食は、前年を下回った。

先行きについては、消費者マインドが持ち直している中で、経済対策の効果が引き続き見込まれるものの、雇用・所得環境が厳しいことや新型インフルエンザの流行による影響を注視する必要がある。

設備投資は、減少している。

設備投資は、減少している。これを需要側統計である「法人企業統計季報」でみると、2009年1－3月期及び2009年4－6月期は減少している。機械設備投資の供給側統計である資本財出荷は、おおむね横ばいとなっている。ソフトウェア投資は、緩やかに減少している。

「日銀短観」によれば、2009年度設備投資計画は大企業製造業、大企業非製造業とともに2年連続の減少が見込まれている。また、設備投資の動きに先行性がみられる設備過剰感は、やや弱まっているものの依然高水準にある。先行指標をみると、機械受注は、緩やかに減少している。建築工事費予定額は、おおむね横ばいとなっている。

先行きについては、企業収益が大幅に減少し、世界景気の下振れ懸念など先行き不透明感が高いなかで、企業の設備投資計画においても大幅な減少が見込まれており、引き続き減少することが懸念される。

住宅建設は、緩やかに減少している。

住宅建設は、緩やかに減少している。持家の着工は下げ止まりつつある。貸家、分譲住宅の着工は減少している。総戸数は、8月は前月比9.3%減の年率67.6万戸となった。総床面積も、おおむね総戸数と同様の動きをしている。

先行きについては、経済対策の効果が期待されるものの、雇用・所得環境が厳しいことなどから、当面、弱い動きが続くと見込まれる。

公共投資は、堅調に推移している。

公共投資は、堅調に推移している。

公共投資の関連予算をみると、国の平成21年度補正予算において、約5.2兆円の予算措置を講じたため、補正後の公共投資関係費は前年度を上回った。また、平成21年度地方財政計画では、投資的経費のうち地方単独事業費について、前年度比3.0%減とし、重点的な配分を行うとしている。

2009年8月の公共工事請負金額及び公共工事受注額は前年を上回った。

先行きについては、予算や事業の見直しに伴う影響等を見極める必要がある。

輸出は、アジア向けを中心に、増加している。輸入は、持ち直している。貿易・サービス収支の黒字は、増加している。

輸出は、アジア向けを中心に、増加している。地域別にみると、アジア向けの輸出は、大幅に増加している。アメリカ向け、EU向けの輸出は、ともに持ち直しの動きがみられる。先行きについては、世界的な在庫調整の進展やアジアを中心として景気持ち直しの動きが広がっていることなどから、当面、増加傾向が続くとみられる。

輸入は、持ち直している。地域別にみると、アジアからの輸入は、増加している。アメリカ、EUからの輸入は、ともに下げ止まりつつある。

国際収支をみると、輸出金額が増加、輸入金額が緩やかな増加となっており、貿易収支の黒字幅は増加している。また、サービス収支の赤字幅は横ばいとなっている。そのため、貿易・サービス収支の黒字は増加している。

2. 企業活動と雇用情勢

生産は、持ち直している。

鉱工業生産は、持ち直している。

先行きについては、輸出の増加傾向などから、当面、持ち直しが続くことが期待される。なお、製造工業生産予測調査においては、9月、10月ともに増加が見込まれている。

また、第3次産業活動は、持ち直しの動きがみられる。

企業収益は、大幅な減少が続いているが、そのテンポは緩やかになっている。また、企業の業況判断は、依然として厳しい状況にあるものの、全体として持ち直しの動きが続いている。ただし、中小企業ではそのテンポは遅い。倒産件数は、おおむね横ばいとなっている。

企業収益の動向を「法人企業統計季報」でみると、2009年4－6月期の経常利益は、売上高が減収となったこと等により前年同期比53.0%減となり、8四半期連続の減益となった。業種別にみると、製造業が89.2%の減益、非製造業が26.4%の減益となっている。「日銀短観」によると、2009年度の売上高は2年連続の減収、経常利益は3年連続の減益を見込んでいる。

企業の業況判断について、「日銀短観」をみると、大企業製造業、非製造業の業況判断は2四半期連続の改善となり、中小企業製造業、非製造業の業況判断はそれぞれ7四半期ぶり、11四半期ぶりの改善となった。ただし、中小企業全体としてみると、大企業と比べ改善のテンポは遅い。

また、企業倒産は、おおむね横ばいとなっている。倒産件数は、8月1,241件の後、9月は1,155件となった。負債総額は、8月2,842億円の後、9月は3,087億円となった。

雇用情勢は、悪化傾向が続いており、極めて厳しい状況にある。

雇用情勢は、悪化傾向が続いており、極めて厳しい状況にある。

完全失業率は、8月は前月比0.2%ポイント低下し5.5%となり、高水準で推移している。完全失業者数は減少し、就業者数は増加した。15～24歳層の完全失業率は上昇している。

新規求人数は減少傾向で推移している。有効求人倍率は横ばいとなっているものの、依然として過去最低にある。雇用者数はこのところ持ち直しの動きがみられる。製造業の残業時間は生産が持ち直していることを反映し、増加している。「残業規制」等の

雇用調整を実施した事業所割合は、上昇している。企業の雇用人員判断は、9月は過剰感が弱まっているものの、依然として高水準にある。

賃金の動きをみると、定期給与は持ち直しの動きがみられる。ボーナスを含む特別給与の大幅な減少に伴い、現金給与総額は大幅に減少している。

3. 物価と金融情勢

国内企業物価は、横ばいとなっている。消費者物価は、緩やかに下落している。

国内企業物価は、横ばいとなっている。9月の国内企業物価は前月比で0.1%上昇し、夏季電力料金調整後では前月比で0.0%となった。輸入物価は、契約通貨ベースで上昇しているものの、為替の影響により円ベースでは下落している。

企業向けサービス価格の基調を「海外要因を除くベース」で見ると、緩やかに下落している。

消費者物価の基調を「生鮮食品、石油製品及びその他特殊要因を除く総合」（いわゆる「コアコア」）で見ると、緩やかに下落している。8月は、季節調整済前月比で0.1%下落した。「生鮮食品を除く総合」（いわゆる「コア」）は、緩やかに下落している。8月は、季節調整済前月比で0.2%下落した。

先行きについては、消費者物価（コアコア）は、当面、緩やかな下落傾向で推移すると見込まれる。

株価（日経平均株価）は、10,300円台から10,500円台まで上昇した後、9,600円台まで下落し、その後10,000円台まで上昇している。対米ドル円レートは、92円台から88円台まで円高方向で推移した後、89円台で推移している。

株価は、アメリカ株価の動向等を背景に、10,300円台から10,500円台まで上昇した後、9,600円台まで下落し、その後10,000円台まで上昇している。対米ドル円レートは、92円台から88円台まで円高方向で推移した後、89円台で推移している。

短期金利についてみると、無担保コールレート（オーバーナイト物）は、0.1%付近で推移している。ユーロ円金利（3ヶ月物）は、0.5%台前半で推移している。長期金利は、アメリカの長期金利の動向等を背景に、1.3%台前半から1.2%台半ばまで低下した後、1.3%付近で推移している。企業金融については、企業

の資金繰り状況は全体としては改善しているものの、中小企業を中心に依然厳しさがみられる。民間債と国債との流通利回りスプレッドは総じて横ばいとなっている。

マネタリーベースは、前年比 4.5%の伸びとなっている。M2 は、前年比 3.0%の伸びとなっている。

4. 海外経済

世界経済は雇用が悪化するなど引き続き深刻な状況にあるが、景気刺激策の効果もあってアジアを中心に持ち直しの動きが広がっており、景気は下げ止まっている。先行きについては、緩やかな持ち直しに向かうと見込まれる。ただし、信用収縮や雇用の悪化等により、景気が低迷を続けるリスクがある。

アメリカでは、失業率が 10%近傍まで上昇するなど、引き続き深刻な状況にあるが、政策効果もあり、景気は下げ止まっている。先行きについては、基調としては緩やかな持ち直しに向かうと見込まれる。ただし、信用収縮の継続や雇用の悪化等により、景気が低迷を続けるリスクがある。

2009 年 4 - 6 月期の GDP 成長率（第三次推計値）は、個人消費が減少したものの、政府支出の増加に加え、設備投資の減少幅が縮小したことから、前期比年率 0.7%減となった。

足元を見ると、消費は政策効果による下支えもあり、持ち直しの動きがみられる。さらに 8 月は自動車買換え支援策の効果も加わり増加した。しかし、9 月の自動車販売台数は、政策効果の反動もあり大幅に減少した。設備投資は減少のテンポが緩やかになっている。住宅着工は低水準にあるものの、持ち直しの動きがみられる。

生産は持ち直しの動きがみられる。雇用面では、雇用者数は減少幅が縮小傾向にあるが、失業率は上昇傾向にある。物価面では、コア物価上昇率はやや低下している。

9 月 22、23 日に開催された FOMC では、政策金利は 0% から 0.25% の範囲で据え置きとされた。また、住宅ローン担保証券及び政府機関債の購入完了の時期を、これまでの 09 年 12 月末から 10 年 3 月末に延長することが決定された。

アジア地域については、中国では、景気刺激策の効果もあり、景気は内需を中心に回復している。先行きについては、欧米向けを中心に輸出は弱い動きが続くものの、引き続き内需が堅調に推移するとみられることから、回復傾向が続くと見込まれる。ただし、マネーサプライの急増によるリスクには留意する必要がある。

その他アジア地域では、景気刺激策の効果や中国向け輸出の増加もあり、総じて景気は持ち直している。ただし、一部でこのところ生産の回復に足踏みがみられる。先行きについては、引き続き中国向けの輸出が堅調に推移するとみられること等から、回復に向かうと見込まれる。ただし、欧米等先進国向けの輸出の低迷が続くこと等により、本格的な回復が遅れるリスクがある。

中国では、4兆元規模の投資や自動車・家電の購入支援策等の景気刺激策の効果もあり、景気は内需を中心に回復している。2009年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比7.9%となった。消費は堅調に増加している。固定資産投資は高い伸びが続いている。輸出は持ち直しつつある。生産は回復している。消費者物価は下落している。

韓国、台湾では、景気刺激策の効果や中国向け輸出の増加もあり、景気は持ち直しているが、このところ生産の回復に足踏みがみられる。シンガポールでは、景気はこのところ持ち直している。タイ、マレーシアでは、景気は底入れしている。

ヨーロッパ地域では、景気は後退しており、失業率が高水準であるなど引き続き深刻な状況にあるが、自動車買換え支援策等の政策効果により、ドイツ、フランス等一部の国で下げ止まりもみられる。先行きについては、基調としては緩やかな持ち直しに向かうと見込まれる。ただし、自動車買換え支援策の反動や信用収縮、雇用の悪化等により、景気が低迷を続けるリスクがある。

ユーロ圏では、景気は後退しており、失業率が高水準であるなど引き続き深刻な状況にあるが、政策効果により下げ止まりつつある。2009年4－6月期のGDP成長率は、前期比年率0.7%減となった。生産は下げ止まり、輸出は下げ止まりつつある。

ドイツ、フランスでは、引き続き深刻な状況にあるものの、政策効果により景気は下げ止まっている。特に、個人消費は自動車買換え支援策により、持ち直している。なお、ドイツでは9月2日に買換え支援策が終了した。フランスでは2010年まで段階的に減額しつつ延長することが決定された。

英国では、内需を中心に景気は後退しており、失業率が高水準であるなど引き続き深刻な状況にあるが、収縮のテンポは緩やかになっている。2009年4－6月期のGDP成長率は、前期比年率2.3%減となった。

失業率は、ユーロ圏では、フランス、スペインを中心に上昇しており、英国でも上昇している。消費者物価は、ユーロ圏では、前年のエネルギー価格上昇の影響により、前年比では下落している。英国では、消費者物価上昇率（前年比）は低下している。

中・東欧等の新興国の景気悪化により、欧州の金融機関の貸出の不良債権化が進み、信用収縮が深刻化するリスクがある。

欧州中央銀行は、10月8日の理事会で、政策金利を1.0%で据え置くことを決定した。イングランド銀行は、10月8日の金融政策委員会で、政策金利を0.5%で据え置くことを決定した。

国際金融情勢等

金融情勢をみると、世界の株価は、アメリカとヨーロッパではいったん大幅に下落したものの、やや上昇傾向にある。一方、中国ではおおむね横ばいで推移した。短期金利についてみると、ユーロドル金利（3か月物）がおおむね横ばいで推移した。主要国の長期金利は、アメリカとドイツではやや低下し、英国では低下した。ドルは、ポンド以外の主要通貨に対して減価した。原油価格は、60ドル台半ばまで下落した後、70ドル台半ばまで上昇した。